

イライジャ - ナンバー・ツー

預言的特徴

Jeff Pippenger

2023-09-27

前回の記事で、エリヤを象徴として位置づけました。ウィリアム・ミラーの規則に従えば、「象徴」は複数の意味を持ちうるものです。したがって、象徴としてのエリヤは、エリヤとモーセという二重の象徴の一方をも表しうるのです。エリヤとモーセの二重の象徴は『ヨハネの黙示録』全体を貫いており、この二重の象徴が何を表すのかが不確かであるということは、恩恵期間が閉じる直前に封印が解かれる『ヨハネの黙示録』のメッセージについて不確かであるということにほかなりません。このため、ここではエリヤの象徴に結びつけられているいくつかの預言的特質を具体的に取り上げます。

私たちには、それらの預言的な特質を立証する三人の主要な証人がいる。その証人は、預言者エリヤ、バプテスマのヨハネ、そしてウィリアム・ミラーであり、靈感によって彼らは互いに入れ替え可能な象徴と見なされている。

ウィリアム・ミラーが宣べ伝えた真理を受け入れるように、何千人もの人々が導かれ、エリヤの霊と力をもってそのメッセージを宣べ伝えるために、神のしもべたちが起こされた。イエスの先駆けであるヨハネのように、この厳粛なメッセージを説いた人々は、斧を木の根元に置き、人々に悔い改めにふさわしい実を結ぶよう呼びかけねばならないと感じた。彼らの証言は、教会を目覚めさせて強く感化し、その真の性格を明らかにするようなものであった。そして、やがて来る怒りから逃れよという厳粛な警告が響かされると、教会に連なっていた多くの者がその癒しのメッセージを受け入れ、自らの背信を悟り、悔い改めの苦い涙と魂の深い苦悩をもって、神の前にへりくだった。そして神の御霊が彼らの上にとどまると、彼らもまた「神を恐れ、その栄光を彼に帰せよ。彼の裁きの時が来たからである」という叫びをともに響かせた。『初期の著作』233頁。

エリヤ、バプテスマのヨハネ、そしてミラーには、彼らの働きを導き、特徴づける特別な霊が与えられていた。彼らの証しは、「教会を目覚めさせ、力強い影響を及ぼし」、その教会の「真の性質」を「明らかにする」ことを意図したものであった。アハブの時代であれ、バプテスマのヨハネの時代であれ、ウィリアム・ミラーの時代であれ、彼らが向き合っていた教会はみな、ラオデキヤ的な盲目にとらわれており、その深さと暗さゆえに、メッセージは「木の根元に斧を置く」ほど直接的である必要があった。それには猶予期間の終結の告知が含まれており、バプテスマのヨハネの場合には、それは「まさに来ようとしている」「怒り」の警告であった。「神を恐れ、彼に栄光をささげよ。彼の裁きの時が来たからだ」と宣べ伝えたミラーのメッセージも、来たるべき怒りの警告であった。

ヨハネはその声をラッパのように高らかに上げた。彼に与えられた使命は、「わたしの民にその背きを、ヤコブの家にその罪を告げよ」（イザヤ 58:1）というものであった。彼は人間の学問を身につけてはいなかった。神と自然が彼の師であった。しかし、昔の預言者のようにその声を響かせ、墮落した国民に悔い改めを呼びかけるだけの

大胆さをもって、キリストに先立って道を備える者が必要とされた。『選ばれたメッセージ』第2巻、148ページ。

エリヤは、その日、神に仕えるかバアルに仕えるかを選ぶように、その時代の人々に命じたが、その世代は一言も答えなかった。これはバアルを選ぶに等しい。

まさにこの時ほど、忠実な警告と戒め、そして厳正で率直な対処が必要とされている時はかつてなかった。サタンは、自分の時が短いことを知って、大いなる力をもって降りてきた。彼は耳ざわりのよい作り話で世界を氾濫させており、神の民は耳ざわりのよいことを語ってもらうのを好んでいる。罪と不義は忌み嫌われていない。私は、押し寄せる闇を押し返すために、神の民はさらに確固たる、決然とした努力を払わなければならないと示された。これまでになく、今こそ神の御霊の綿密な働きが必要である。鈍さを振り払わなければならない。私たちは、それに抗わなければ私たちの滅びとなる怠惰から目を覚まさなければならない。サタンは人の心に強力で支配的な影響を及ぼしている。説教者も人々も、闇の勢力の側にいると見なされる危険にさらされている。今や中立という立場は存在しない。私たちは皆、はっきりと正義の側にいるか、はっきりと悪の側にいるかのどちらかである。キリストは言われた、「わたしと共にいない者はわたしに敵対する者であり、わたしと共に集めない者は散らす者である。」 『証言』第3巻、327頁。

ヨハネは、彼の時代の「墮落した民」を「まむしの子ら」と呼んだ。ミラー派は最終的に、彼らの時代の墮落した民をバビロンの娘たちと見なした。エリヤ、ヨハネ、ミラーのいずれも神学者ではなかった。彼らは皆、庶民の生活の中から召し出された。

イエスにある真理は、柔らかな雲に包まれておられたときに主ご自身が宣べ伝えられたとおり、今日においても確かな真理であり、過去に人々の心を新たにしてきたのと同じ確かさで、それを受ける者の思いを新しくする。キリストはこう言われた。「もし彼らがモーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から一人がよみがえっても、彼らは説得されはしない。」（ルカ16:31）

私たちは一つの民として、聖霊の主権的な導きのもと、純粋な福音の広がりのために主の道を備えなければならない。いのちの水の流れは、進むにつれていよいよ深く広くなっていく。近くでも遠くでも、あらゆる現場で、人々は鋤から、また心を大きく占めがちな一般の商業・事業の職からも召し出され、経験を積んだ、真理を理解している人々と結びついて教育を受けるようになる。神のこの上なく驚くべきみわざによって、困難の山々は取り除かれ、海に投げ込まれるだろう。イエスにある真理の力を体験した者として、私たちは働こう。

この時期には、神こそが事態の主であられることを明らかにする一連の出来事が起こる。真理は明確で紛れのない言葉で宣べ伝えられる。真理を説く者たちは、秩序正しい生活と敬虔な言動によってその真理を示そうと努める。そして彼らがこうしていくとき、真理を擁護することにおいて、また神がその真理に与えておられる確かな適用を示すことにおいて、彼らは力を帯びるようになる。

真理を知りそれを教えてきた者たちが、人間的な理解に逸れて、欺かれた人々の心に自分たちの作り話を与えるようになるとき、かつては伝道の働きに従事していたが、レストランや食料品店、その他の商業的な仕事の経営へと引き寄せられていった人々

は、歩調を合わせ、熱心に聖書を学び、神の言葉を手に、天の御使いたちと協力して、聖書の真理、すなわち霊的な食物を分かち与えるべき時である。この働きはいま、神によって任命された働き人を切実に呼び求めている。そのとき全能の神は、困難という山々に向かって、「動いて海に投げ込まれよ」と言われるであろう。ポールソン・コレクション、73、74。

エリヤ、ヨハネ、そしてミラーはそのような者であり、したがって「より一般的な」「職業」から召される人々を表している。というのも、かつて真理を教えていた「その人々」は、結局は「人間的な理解へとそれていき、欺かれた心に自分たちの作り話という一皿を分け与える」からである。召された普通の人々は、神が与えたとおりに、聖書の預言の「確かな適用」を示すだろう。この箇所ではシスター・ホワイトは、「山々」を「困難の山々」と二度にわたって特定している。これらの人々の働きには、「あらゆる山を低くする」ことが含まれていた。質素な境遇の鋤から呼び出された普通の人々によって成し遂げられる働きは、当時の神学者たちが振る舞う人間の作り話の料理とは対照的に、正しい聖書的な方法論を見極める働きを表している。

バプテスマのヨハネの働きと、終わりの日にエリヤの霊と力をもって人々を無関心から目覚めさせるために出ていく者たちの働きとは、多くの点で同じである。彼の働きは、この時代になされなければならない働きの型である。キリストは、義をもって世をさばくために、再び来られる。世界に与えられる最後の警告のメッセージを担う神の使者たちは、ヨハネがキリストの初臨のために道を備えたように、キリストの再臨のために道を備えなければならない。この備えの働きにおいては、「すべての谷は高められ、すべての山は低くされ、曲がった所はまっすぐにされ、険しい所は平らにされる」。歴史は繰り返され、もう一度「主の栄光が現れ、すべての人がともにそれを見る。主の御口がこれを語られたからである」。

サザン・ウォッチマン、1905年3月21日

イザヤが指摘した三人の改革者の特徴は、すべての谷は高められ、すべての山は低くされ、曲がったものはまっすぐにされ、でこぼこなところは平らにされるということである。谷を高くし、山を低くし、曲がったものをまっすぐにし、でこぼこなところを平らにすることによって備えられる主の道こそ、昔からの道である。

荒れ野で叫ぶ者の声がある。「主の道を備えよ。荒れ地で、私たちの神のために大路をまっすぐにせよ。」すべての谷は高められ、すべての山と丘は低くされ、曲がったものはまっすぐにされ、でこぼこの所は平らにされる。そして主の栄光が現れ、すべての人がともにそれを見る。主の口がこれを語られたからである。イザヤ書40章3-5節。

あれこれと難癖をつけるユダヤ人たちが、来るべきエリヤは彼なのかと洗礼者ヨハネに尋ねたとき、彼は自分はそうではないと答えたが、続いて自分こそイザヤ書の一節に言われている者だと述べた。

これがヨハネの証しである。ユダヤ人たちがエルサレムから祭司とレビ人を彼のもとに遣わし、「あなたはどなたですか」と問いただしたときのことである。彼は告白し、否まなかった。むしろ、「私はキリストではない」と告白した。彼らはさらに尋ねた。「では、何なのですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではない。」「では、あの預言者ですか。」彼は答えた。「いいえ。」そこで彼らは彼に言った。「それ

では、あなたは誰なのですか。私たちが遣わした者たちに答えを持ち帰るためです。あなたは自分のことを何と言いますか。」彼は言った。「私は荒野で叫ぶ者の声である。『主の道をまっすぐにせよ』と、預言者イザヤが言ったとおりに。」ヨハネによる福音書 1:19-23.

「主の道」の備えは、人々が歩むべき「道」についての聖書的理解を整えるために、天使がミラーに理解させ、用いるよう導いた方法論を明らかにしている。あらゆる「山」は低くされるべきであった。というのも、聖書の預言における山々は、一見したところ理解するにはあまりにも難解に見える真理を表しているからである。北の王が征服しようとしているダニエル書十一章四十五節の「栄光の聖なる山」を理解するには、まずエルサレムにある文字どおりの「栄光の聖なる山」を特定することが必要であり、それが預言的に霊的な「栄光の聖なる山」を定義している。メギドの山を意味するハルマゲドンと呼ばれるその山を説明するには、文字どおりのメギドに行かなければならない。物事の初めがその終わりを示すという原則を用いると、難しいものとして表されている預言上の困難は解消される。

イザヤによって示され、ヨハネによって言及され、ミラーによって提示された方法論は、すべての谷を高める。それがイザヤ書二十二章の「幻の谷」であれ、エゼキエル書の「枯れ骨の谷」であれ、あるいはヨエル書の「ヨシャパテの谷」であれ、ミラー派の歴史においては「驚くべき数を数える者」パルモニとして、また私たちの歴史においてはアルファでありオメガである驚くべき言語の達人として表されるキリストの品性を正しく理解することに基づくその方法論こそが、神のことばの「谷々」によって表されている預言の真理を高めるのである。

曲がったものをまっすぐにし、荒れた所を平らにするということは、ラオデキアの祭司職が、毒された作り話の料理を支えるために用いている慣習や伝統を正す働きを象徴している。エリヤの働きは、神学者や祭司たちの作り話に対抗する正しい聖書的な方法論を表すものとして、明確に位置づけられている。その働きは、教育を受けた祭司や神学者ではなく、「普通の人々」によって成し遂げられる。これら三人の証人の預言的特質の中には、来るべきエリヤが男性であるという単純な事実も含まれている。

その指摘は取るに足らないように見えるかもしれないが、アドベンティズムの神学者たちは自分たちの作り話を擁護しようとして、ホワイト姉妹がエリヤの霊と力を帯びて来る男について将来のこととして語っている一節を取り上げ、そこに自分たちの作り話じみた説明を付け加え、ホワイト姉妹は自分自身のことを語っていたのだと主張している。

預言は成就しなければならない。主は言われる。「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」エリヤの霊と力をもって来る者がいる。[付録参照。]そして彼が現れると、人々はこう言うかもしれない。「あなたは熱心すぎる。あなたは聖書を正しく解釈していない。あなたのメッセージをどのように教えるべきか、私が教えてやろう。」

神の御業と人の業を見分けることができない人が多い。私は神が私に与えられるままに真理を語る。今、言っておく。もしあなたがたがあら探しをし続け、反目の心を抱き続けるなら、あなたがたは決して真理を知ることはない。イエスは弟子たちに言われ

た。「わたしには、なおあなたがたに語るべきことが多くあるが、今はあなたがたにはそれに耐えられない。」彼らは聖なる永遠の事柄を理解し受け入れる状態にはなかった。しかし、イエスは助け主を遣わすと約束された。その方は、彼らにすべてのことを教え、イエスが彼らに語られたすべてのことを思い起こさせるであろう。

兄弟たちよ、私たちは人に頼ってはなりません。「その鼻に息のある人間から離れよ。彼は何として数えられるのか。」あなたがたは自分の無力な魂をイエスに委ねなければなりません。山に泉があるのに、谷の泉から飲むのは私たちにふさわしくありません。低い流れを離れ、高い泉へ行きましょう。もし理解できない、あるいは一致できない真理の点があるなら、よく調べ、聖句と聖句を照らし合わせ、神の御言葉という鉱山に真理の堅坑を深く掘り下げなさい。あなたがたは自分自身と自分の意見を神の祭壇にささげ、先入観を捨て、天の御霊にすべての真理へと導いていただきなさい。Testimonies to Ministers, 475, 476.

「エリヤの霊と力をもって来る者がいる」という言葉は、ホワイト夫人の生涯と働きの後に預言的なメッセージを携えて現れると考えられたある個人に当てはめられてしまったことがある。『天に導かれよ』と題する本稿を構成する三つの段落は、1890年1月29日朝、ミシガン州バトルクリークでエレン・ホワイトが行った談話のごく一部にすぎない。この記事は1890年2月18日付の『レビュー・アンド・ヘラルド』紙に掲載された際、『論争の的となっている教理の論点にどう対処するか』という題が付けられていた。本稿から採られ、本巻の特定のページを主に補うために用いられている他の抜粋は、23、104、111、119、158、278、386ページに見いだすことができる。この記事は Selected Messages 1:406-416 に全文再録されており、そのうち『天に導かれよ』という抜粋に当たる部分は412~413ページに載っている。この記事を全文通して読むと、ミネアポリス会議のわずか一年余り後に、バトルクリークの一団に向けてなされたこの発言において、エレン・ホワイトが自らの働きについて語っていたことが明らかになる。彼女の働きに批判的になっていた者たちがいたのである。本巻475ページに掲げられている箇所直前の段落で、エレン・ホワイトが次のように述べていることに留意されたい。

「私たちは、あらゆる違いが溶け去るような状態に至るべきである。もし自分が光を持っていると思うなら、それを示すのは私の務めである。主が私に民に告げるようお命じになるメッセージについて、もし私が他の人々に相談したなら、その光が、神がそれを送られた人々に届かないように、戸が閉ざされてしまうかもしれない。イエスが乗ってエルサレムに入られたとき、『弟子たちの群衆全体が、彼らが見たすべての力あるみわざのゆえに、大声で喜び、神を賛美しはじめ、「主の御名によって来られる王に、祝福があるように。天には平和、いと高き所には栄光」と言った。ところが群衆の中のあるパリサイ人たちがイエスに向かって、「先生、あなたの弟子たちを戒めてください」と言った。すると彼は答えて言われた。「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が直ちに叫び出すであろう」』（ルカ 19:37-40）。」

『ユダヤ人たちは、神の言葉であらかじめ予言されていたメッセージを宣べ伝えることを阻止しようとした。』

そして彼女は再び自らの経験に言及する：

「預言は必ず成就しなければならない。主はこう言われる、『見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす』（マラキ4:5）。だれかがエリヤの霊と力をもって来ることになっており、彼が現れると、人々はこう言うかもしれない、『あなたは熱心すぎる。聖書を正しく解釈していない』。」-Selected Messages, volume 1, 412.

彼女が自分の経験に言及していたことは、次の段落からも明らかであり、そこで彼女は次のように述べている。

「私は、神が私に与えてくださるとおりに、真理を語ろう……」
『牧師への証言』の付録。

エレン・ホワイトが自分の時代の神学者や指導者たちの作り話に対処しなければならなかったという事実は、彼女が自分を、将来エリヤの霊と力を帯びてやって来る「男」と同一視していたことの証拠にはならない。アドベンチズム内部のエレン・ホワイトの多くの反対者たちが、彼女の用いた聖書適用の方法を攻撃したという証拠はどこにあるのか。彼女が「あなたは聖書を正しいやり方で解釈していない」と言われたことが、いったいどこにあるのか。彼女は、世の終わりに、エリヤの霊と力によって力づけられる人々の運動が起こることを明確に示しており、また、彼女がエリヤの力の将来の顕現を預言していた当時に、第三天使の大いなる叫びの運動がすでに起きていると考えていたと示唆する正当な根拠はない。ラオデキヤ的なアドベンチストの神学者たちは、主の大いなる恐るべき日の前に遣わされる預言者エリヤの成就として、ホワイト姉妹が「自分自身の経験」に「言及」しているのだと、自分たちの信徒に信じさせようとするだろう。

見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。マラキ 4:5.

象徴としてのエリヤの預言的特質の一つは、風習や伝統に関する作り話をばらまく祭司制度の虚構に対抗する聖書的な方法論を提示する点にある。彼の「道を備える」働き（「これが道である。これに歩め」）は、墮落した祭司制度の教えに対抗する聖書的な方法論によって成し遂げられる。そして、エリヤ、バプテスマのヨハネ、ミラーという三人の証言に、当時においては将来のエリヤの出現についてのシスター・ホワイトの証言を添えるなら、彼は女性ではなく男性である。パルモニとアルファとオメガの方法論が正しく理解されるとき、それは聖書を解釈するための聖書的規則の単なる集合としてではなく、キリストの品性の写し、すなわちキリストの栄光として認められる。

主の栄光は現れ、すべての人は共にそれを見る。主の口がこれを語られたからである。
イザヤ書 40:5

キリストは御言葉そのものであるゆえ、御言葉を理解するために用いる方法に、キリストの御性質そのものが表されている。

天の聖所にある神の律法は偉大な原本であり、石の板に刻まれ、モーセ五書に記録された戒めは、その誤りなき写しであった。この重要な点を理解するに至った者たちは、このようにして、神の律法の神聖で不変の性格を見いだした。彼らは、かつてないほどに救い主の言葉の力を悟った。「天地が滅び去るまでは、律法から一点一画も決

して消え去ることはない」。マタイ5:18. 神の律法は、御心の啓示であり、御性質の写しであるから、「天における忠実な証人として」永遠に存続しなければならない。ひとつの戒めも廃されておらず、一点一画たりとも変えられていない。詩篇記者は言う。「主よ、あなたの御言葉はとこしえに、天に堅く定まっています」。「主のすべての戒めは確かであり、世々限りなく堅く立っています」。詩篇119:89; 111:7, 8. 『大争闘』 434.

ちょうど十戒がキリストの品性の不変の写しであるように、預言解釈の規則もまた、キリストの品性の写しである。

私たちは、キリスト教の本質は何か、何が真理であるのか、私たちが受け継いだ信仰とは何か、そして聖書の規範-すなわち最高の権威から私たちに与えられた規範-とは何かを、自ら知っていなければならない。信仰の拠り所となる理由も、その事柄が真実であることを示す十分な証拠もないままに信じる人が多くいる。自分の先入観と調和する考えが示されると、彼らはたちまちそれを受け入れてしまう。原因から結果へと論理的に考えず、彼らの信仰には真の土台がないため、試練の時には、自分が砂の上に建てていたのだと知ることになる。

自分の現在の不完全な聖書理解に満足し、これで救いに十分だと思って安んじている者は、致命的な欺きの中に安住している。誤りを見分け、真理として押しつけられてきたあらゆる伝統や迷信を糾弾できるようにするための聖書的論拠を、十分に備えていない者が多い。サタンは、キリストの福音の単純さを損なおうとして、神の礼拝の中に自分自身の考えを持ち込んできた。現在の真理を信じていると主張する多くの者は、かつて聖徒たちに伝えられた信仰、すなわち「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」が何であるかを知らない。彼らは古い道標を擁護しているつもりでいるが、生ぬるく無関心である。自らの経験に織り込み、愛と信仰という真の徳を身につけるとはどういうことかを知らない。彼らは聖書を綿密に学ぶ者ではなく、怠惰で不注意である。聖書の箇所について意見の相違が生じると、目的をもって学ばず、何を信じるかを定めていないこれらの人々は、真理から離れ去る。私たちはすべての人に、神の真理を熱心に探求する必要性をしっかりと刻みつけるべきである。彼らが、何が真理であるかを自分が確かに知っているのだと知るためである。ある者は多くの知識を持つと主張し、自分の状態に満足しているが、彼らには、神を知ったことがない者と変わらないほど、働きへの熱も、神と、キリストが死なれた魂へのいっそうの熱烈な愛もない。彼らは、自分の魂に髓と脂のような滋養を取り入れる〔ために〕聖書を読むのではない。それが自分に語りかける神の御声であるとは感じない。しかし、もし私たちが救いの道を理解し、義の太陽の光を仰ぎ見たいのなら、目的をもって聖書を学ばなければならない。聖書の約束と預言は、贖いの神のご計画に栄光の明るい光を投げかけており、この壮大な真理が明確に理解されていないからである。

『1888年資料』 403ページ

真にキリスト者であるとは、キリストのようであることを意味します。この箇所は、私たちが「キリスト教とは何かを自ら知るべきである」と述べています。そこでは、私たちは「真理とは何か」を「知るべきだ」と言われています。「私たちが受けた信仰が何であるか」も「知るべきだ」とし、さらに「聖書の戒め-すなわち、最高の権威から私たちに与えられた戒め-が何であるか」を「知るべきだ」としています。キリストのようであるた

めには、最高の権威から与えられた聖書の戒めが何であるかを知っていなければなりません。そうした戒めがなければ、私たちはキリストのようにはなれません。というのも、最高の権威によって与えられた戒めは、その方の御品性の写しだからです。

エリヤのもう一つの特徴は、契約の使者のために道を備える働きである。エリヤは、以前の選民が選びから外され、新しい選民が同時に選ばれているという歴史の中で成し遂げられる働きを象徴している。その歴史は、かつての汚れた選民と対照的に、清い供え物として表される民を生み出す清めの過程を示している。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが求める主が、突然その宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者も、見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗濯する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬して清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬する。彼らが義にかなったささげ物を主にささげるためである。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4。

洗礼者ヨハネは、キリストが突然来てご自分の宮を清めるための道を備えた。キリストの宣教の初めと終わりに行われた宮の清めは、マラキ書3章の成就であった。洗礼者ヨハネは、契約の使者がレビの子らを清めるための道を備えた使者であった。

神殿の清めにおいて、イエスはメシアとしてのご自身の使命を告げ、働きを始められた。神のご臨在の住まいとして建てられたその神殿は、イスラエルと世界への目に見える教訓となるよう意図されていた。永遠の昔から、輝く聖なるセラフから人間に至るまですべての被造物が、創造主が内住される神殿となることが、神の目的であった。罪のゆえに、人類は神の神殿ではなくなった。悪によって暗く汚され、人の心はもはや神の栄光を現さなくなった。しかし、神の御子の受肉によって、天のご計画は成就した。神は人間のうちに住まれ、救いの恵みによって、人の心は再び神の神殿となる。神は、エルサレムの神殿が、すべての魂に開かれている崇高な運命への絶えざる証しとなるよう定められた。ところがユダヤ人は、あれほど誇りとしていたその建物の意義を理解していなかった。彼らは自らを、神の御霊のための聖なる神殿としてささげることがをしなかった。不浄な取引の騒ぎで満ちていたエルサレム神殿の庭は、肉欲的な情欲と不浄な思いの存在によって汚された心の神殿を、あまりにも真実に表していた。世の買う者売る者から神殿を清めることによって、イエスは、魂を腐らせる地上的な欲望、利己的な情欲、悪しき習慣という罪の汚れから心を清めるというご自身の使命を宣言された。『あなたがたが求めている主が、突然その宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者が、見よ、来る、と万軍の主は言われる。しかし、その来られる日のうち、だれが耐え得ようか。主が現れるとき、だれが立っていられようか。主は精錬する者の火、布さらしの灰汁のようである。主は銀を練って清める者として座し、レビの子らを清め、金や銀のように彼らを精錬される。』マラキ 3:1-3. *The Desire of Ages*, 161.

バプテスマのヨハネは、キリストが突然来てご自身の神殿を清めるための道を備えた使者であり、ウィリアム・ミラーもまた、1844年10月22日にキリストが至聖所に突然来る

ための同じ備えの働きを成し遂げた。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

ジョンとミラーは、マラキが示した、今私たちの歴史の中で成就しつつある清めを象徴していた。

預言者は言う。「私はもう一人の天使が天から降りてくるのを見た。大いなる権威を携え、その栄光によって地は照らされた。そして彼は力強い大声で叫んだ、『大バビロンは倒れた、倒れた。悪霊の住みかとなった』」（黙示録 18:1, 2）。これは第二の天使によって与えられたのと同じメッセージである。バビロンが倒れたのは、「彼女がその淫行の怒りのぶどう酒をすべての国々に飲ませたからである」（黙示録 14:8）。そのぶどう酒とは何か——彼女の偽りの教義である。彼女は第四戒の安息日の代わりに偽りの安息日を世に与え、また、エデンでサタンが最初にエバに語った虚偽——魂の自然不死——を繰り返してきた。これに類する多くの誤りを彼女は広く広め、「人間の命令を教義として教えている」（マタイ 15:9）。

イエスが公の宣教を始められたとき、神殿を冒瀆による汚れから清められた。宣教の働きの最後の行為の一つは、神殿の二度目の清めであった。同様に、世に警告を与える最後の働きにおいて、教会に対して二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージはこうである。「倒れた、倒れた、大いなる都バビロンは、彼女はその姦淫の怒りのぶどう酒を諸国の民に飲ませたからである」（ヨハネの黙示録14章8節）。そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びの中で、天からこう言う声が聞こえる。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、その災いを受けないために。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである」（黙示録18章4、5節）。『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、118頁。

キリストの宣教における二度の神殿清めと、ミラー派の歴史における二度の神殿清めは、マラキ書三章の成就であり、2001年9月11日にニューヨーク市の巨大な建物群が神のひと触れによって打ち倒され、黙示録十八章の力強い天使がその栄光をもって地を照らすために降りてきたときに始まった二度の神殿清めを指し示している。ほかにもあるが、これは、主の大いなる恐るべき日の前に来るエリヤの預言者がエレン・ホワイトであったと主張する、アドベンチズムのラオデキヤ的神学者たちが供する作り話を否定するものである。黙示録十八章の天使が降臨するときに行われる神殿清めは、エレン・ホワイトが眠りについた八十六年後に始まった。

洗礼者ヨハネとその弟子たち、ミラーとミラー派、そしてフューチャー・フォー・アメリカは、契約の使者がご自分の宮に突然来て、その宮を冒瀆による汚れから清めるための道を備える使者たちを表している。

象徴としてのエリヤは、一人の人間を表している。彼は、祭司的な神学者ではなく、平凡な生活の歩みから召し出された人を表す。彼の働きは、正しい聖書的な方法論を提示する。これは、至高の権威によって与えられた規範である。彼の働きは、寓話や慣習・伝統にもとづく現在のラオデキヤ的祭司職の方法論と対決している。彼は、差し置かれた選民の残りの者から新しい選民を起す浄めの過程のために道を備える。その浄めの過程は、突然に起こるものとして位置づけられている。

エリヤはまた、神が特別に確立し、神だけの務めであると明確に定めた務めと働きを表している。

次の記事で、ミラー派の歴史においてこれを実証します。

夕の献げ物の時刻になったとき、預言者エリヤが進み寄って言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。きょう、あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、また、私がこれらすべての事をあなたの仰せによって行ったことが知られますように。」列王記上 18章36節